

「拓魂碑」

秋田県能代市・東雲原開拓

戦後開拓地は、農耕の対象外だった山間僻地や軍用跡地が多かった。

秋田県能代市の東雲原（しのめはら）開拓地は元陸軍飛行場跡地で、1946（昭和21）年、引揚者・戦災者等144戸が入植した。内訳は、東雲開拓110戸、拓友開拓34戸。

不毛の原野で開拓者は、開墾に懸命の努力を続けた。開拓当初は畑作だったが、経営が不安定なため、水田化を目指した。入植から約25年でようやく、畑地が水田となった。複合で酪農、肉用牛などの畜産や野菜を組み入れた経営も増えた。

現在、水稻を中心とした営農が展開され、規模の大きさから、県内では重要な食糧基地となっている。

開拓記念碑は入植25周年記念事業として、71年に東雲・拓友入植者一同が建立したもので、碑銘は「拓魂碑」。50周年記念事業では、隣接して「平和祈念碑」が建立された。

拓魂碑の碑文には、「開拓者は徒手空拳^{とじまぐらひ}で過酷な労働に直面し、暗い流汗と苦渋に満ちた開拓史の中で志半ばにして物故した者、或いは離農のやむなきに至った者等、その数決して尠^{すく}しとしない」とあり、大変な苦労がうかがい知れる。

東雲拓友開拓

碑文 拓魂碑 揮毫 秋田県知事 小畑 勇二郎

開拓は戦後荒廃と困苦の中に、祖国再建の国策として実施され、此の国家的要請に応じて東雲原に入植した開拓者は一四五戸であった。其の多くは海外引揚者、被戦災者、復員者等でその土地も僻遠不毛の地で、営農と生活の基盤は皆無に等しい状態であった。

由来開拓は農業の創造的事業でありその推進には適切な施策を要する事は言は俟たないが、戦後必然的に発足した開拓にはその余裕がなく、開拓者は徒手空拳で過酷な労働に直面し、暗い流汗と苦渋に満ちた開拓史の中で志半ばにして物故した者、あるいは離農のやむなきに至った者等、その数決して尠^{すく}しとしない。それにも拘わらず不撓の精進を続け今漸くその成果をみるに至った。

顧みれば草創以来既に二十有五星霜。嘗ての荒野は今や整齐とした四百五十余町歩の沃土と化し、現存する百二十五戸の同志は益々団結を強め模範的経営者として亦団体として、農林大臣賞の栄に浴した事は我等開拓者の努力の賜と聊か自負するところである。

茲に東雲原開拓者は入植二十五周年を記念し、更に今後の躍進を期する為拓魂不滅を信じて碑を建立するものである。

昭和四十六年十一月吉辰

東雲拓友 開拓入植者一同建之

